

レ
ン
タ
ル
フ
ア
ー
ザ
ー

市
村
藍
美

人物

三谷誠（40）リストラされた会社員・バツ

1

中川心（8）麻美、行忠の娘

中川麻美（38）心の母

中川行忠（36）心の父・警察官

矢野翔吾（22）誘拐犯

原真由美（8）誘拐された少女

原早苗（26）真由美の母

林田あきと（26）警察官

三谷涼香（19）誠の娘

岡本順子（38）スナックのママ

面接官の男

三谷にぶつかった女

定食屋の店員

警察官

アナウンサー

高校生

あらずじ

会社をクビになった三谷誠(40)はある日
レンタル家族のアルバイトを始める。

最初の依頼者は中川心(∞)の母親の中川
麻美(38)。

依頼内容は病弱な自分と仕事で忙しい中
川行忠(36)の代わりに心の誕生日までの
二日間いろんなところに連れて行って欲
しいと言うものだった。

三谷は心の元へ行き、初めに遊園地に向
かう。

三谷はそこで心のためにいい父親を二日
間全うすることを決意するが、最近巷を
騒がせている原真由美(∞)誘拐事件の犯
人と間違われ追われる身となる。

しかし心は三谷とはぐれてしまう。

一方矢野と真由美もはぐれてしまう。

矢野は心、三谷は真由美と出会い、双方行
忠、林田あきと(26)に追われる身となる。

○公園

親子づれで賑わっている公園。

三谷誠（40）、スーツ姿でベンチで寝転がっている。

緑色のネクタイをしている。

三谷「あつ……」

ぼうつと親子を眺めている。

ボールが三谷のところに転がってくる。

原真由美（8）、三谷のところへ駆け寄る。

三谷、真由美とボールを交互に見て、ボールを拾い差し出す。

真由美、それを受け取り、小さくお辞儀をして矢野翔吾（22）の元へかけていく。

左足を引きずっている。

三谷、それを見送る。

矢野、真由美を抱き上げる。

三谷、ため息をつく。

頭にサッカーボールが飛んでくる。

三谷「いてっ」

小さい子供たちと目が合う。

子供、逃げていく。

三谷、頭を撫でてゆっくり立ち上がりがりる。

会社のバックをゴミ箱に捨てる。

○レンタル家族の事務所・中

三谷、俯きがちで椅子に座っている。

面接官の男、履歴書を見ながら、

面接官の男「〇〇年勤めた広告会社を数

日前にクビに……。へえ、それはまた」

三谷「はい……」

面接官の男「まあどこも不景気ですからねえ」

三谷「ええ……」

沈黙が流れる。

三谷「えつと……」

面接官の男の電話がなる。

立ち上がった、

面接官の男「分かりました。今日からよろしくお願いいたします」

三谷「はい……。はい？」

三谷、驚いて顔をあげる。

面接官の男、資料を片付けながら、
面接官の男「ちょうど人が足りず困っていたところですよ。二日間拘束される依頼がございました。なかなか、二日丸々となると人がいないんです」
ファイルから資料を取り出し三谷に押し付けるように渡す。

面接官の男「うちは依頼を引き受ける前に一度顔合わせと打ち合わせを行っております。早速ですが明日

お願いしてよろしいですか？」

三谷「え、明日？」

面接官の男「何か不都合でも？」

三谷「い、いえ！」

面接官の男「ではお願いします。もしも
もし？」

面接官の男、スマホを耳に当て部
屋から出ていく。

三谷、それを見送ってから、大き
く息を吐く。

○三谷家・洗面所（朝）

三谷、ひげを剃っている。

○同・リビング（朝）

三谷、軽く髪を整えてパンをト
スターに入れる。

○同・自室（朝）

三谷、クローゼットを開ける。

○同・リビング（朝）

パンの焼ける音。

三谷、ズボンのベルトをつけながらリビングにやってくる。

アナウンサーの声「犯人の特徴は首元の大きなほくろで、真由美ちゃんの母親はせめて一刻も早く娘だけにでも会いたいと……」
トースターを開けてパンを口に
啜える。

○同・玄関（朝）

三谷、家を慌てて出ようとするが、全身鏡の前で立ち止まり、緑色のネクタイを締め直す。
ジャケットを整え、髭の剃り残しを確認する。

首元の大きなほくろが見える。
大きく深呼吸する。

○病院・外（朝）

三谷、病院を見上げる。

急いで新しいリュックからファイルを取り出し住所と部屋番号を確認する。

三谷「え……」

○病院・307号室・廊下（朝）

三谷、おそるおそる扉をノックする。

中川麻美（38）の落ち着いた声が聞こえてくる。

麻美の声「どうぞ」

○同・307号室・中（朝）

三谷、そっと扉を開ける。

麻美以外のベッドは空。

麻美、微笑みながら、

麻美「こんな姿でごめんなさい」

三谷、背筋をただして、

三谷「い、いえ」

麻美「そんなに緊張なさらなくても」

麻美、小さく笑う。

三谷、少し辺りを見わたしてから

麻美の元へ向かい、

三谷「三谷誠と申します」

麻美「中川麻美です。ああ、どうぞそちらに」

麻美、椅子に視線をむける。

三谷「失礼します……」

ゆっくりと腰を下ろす。

麻美「三谷さん、お子さんはいらっしゃる？」

三谷「え。は、はい。娘が一人」

麻美、それを聞いて微笑む。

麻美「そうなんです。うちと一緒だわ」

スマホの写真を三谷に見せる。

麻美「三谷さんにはこの子の父親を二日間やって欲しいんです」

麻美、中川心(∞)の2ショット。

麻美「∞月〱日、娘の誕生日なんです。

旦那は仕事が忙しくて全然休みを取れないし、私は明後日、手術があるから」

三谷「え」

麻美「娘に寂しい思いはさせたくないの。

誕生日は、私が必ず祝うから、せめてそれまで」

三谷「いや、あの」

麻美「よろしくお願いします」

麻美、頭を下げる。

三谷、冷や汗をかいている。

麻美「あの、それともう一つ」

○同・廊下(朝)

三谷、扉に背をあずけて立っている。

ずるずると座り込んで顔を手で覆う。

深いため息をつく。

○歩道橋

三谷、とぼとぼ歩いている。

タバコに火をつけようとしたところ
でスマホが鳴る。

スマホを見て、おずおず電話に出る。

三谷「も、もしもし？」

○大学・休憩室

三谷涼香（16）、缶コーヒーを飲みながら、

涼香「もしもしパパ？ママがさ、来月再婚するんだって。知ってた？」

○歩道橋

三谷、立ち止まって、

三谷「え？」

涼香の声「あ、やっぱり？」

○大学・休憩室

涼香、椅子に深くよりかかりながら、

涼香「もー、私も昨日まで知らなくてさ」

○歩道橋

通行人が三谷を避け、横切る。

三谷、小さく頭を下げて再び歩き出す。

三谷「そ、なんだ」

○大学・休憩室

涼香の友人が涼香の肩を叩き立ち上がる。

涼香、それにならって立ち上がりながら、

涼香「あーごめん。また今度話そ」

○歩道橋

三谷、焦ったように、

三谷「あ、涼香！」

涼香の声「なに？」

三谷「あ、その」

涼香「ごめんほんとにもう行かなきゃ。

バイバイ」

電話、切れる。

三谷、切れたスマホを見つめ、タバコを箱の中に戻す。

○遊園地

家族連れやカップルで賑わう遊園地。

○同・観覧車・中

三谷、心、向かい合って座っている。

三谷、俯いている。

心、外を眺めている。

三谷「さ、最近学校はどうだ？」

心、三谷に視線をむけるが無視。

三谷、緑色のネクタイを直しながら、

三谷「えっと……」

観覧車の窓から親子が見える。

その子供、手に持っていた緑色の風船を離してしまう。

心「パパは学校のことなんて聞かない」

三谷「え」

心「あと、パパのネクタイはいつも青色」
風船、ふわふわと飛んでいく。

○同

心、早足で人混みを進んでいく。

三谷、アイスを片手に早足で心を追いかける。

三谷「待って！」

心、振り向かずに進んでいく。

三谷「こ、心！」

心、ぴたりと足をとめ振り返る。

心「パパは私の名前なんて呼ばない」

三谷、驚いて足を止める。

通行人の女、三谷にぶつかる。

アイスが落ちる。

三谷「あ」

女「すいません！」

三谷「あ、いえいえ」

女、三谷の首元の大きなほくろを見る。

三谷、アイスと心を交互に見て、女に小さく会釈をし、心を追いかける。

取り残された女、三谷の後ろ姿をじっと見て、スマホを取り出す。

女「あ、もしもし。すいません。見間違えかもしれないんですけど」

○同・フードコート（夕）

心、三谷、椅子に座っている。

心「私のこと、パパは嫌いな」

三谷「え。：：：そんなこと」

心、それに被せるように、

心「私が生まれたせいで、ママがいつぱい入院するようになったから」

三谷「：：：そんなこと、ないよ」

心、三谷をじっと見る。

三谷「もし、心ちゃんのパパが心ちゃんのことを嫌いだって言うんなら、心ちゃんのママは今もパパと夫婦ではないよ」

心、俯く。

三谷、困ったように頭をかいて、
三谷「帰ろっか」

○警察署・中（夕）

中川行忠（36）、疲れた表情でパソコンと向かい合っている。
青いネクタイをしている。

林田あきと（26）、行忠に

林田「お疲れ様です」

行忠、それに気づかずため息をついてコーヒーを飲む。

林田、呆れたように近寄って、

林田「この前の強盗殺人の資料ですか？」

行忠「正確には強盗殺人及び誘拐」

林田「もう夜遅いですよ」

行忠、腕時計を確認する。

行忠「そうだな」

林田「働きすぎです」

行忠、帰る準備をする。

行忠「なあ」

林田「はい」

行忠「お前、誘拐された子供の母親に会

ったか？事件後に」

林田「え？まあ」

行忠「俺は二回会った。事件後すぐと、

それから五日後」

行忠、スマホをポケットにしまいながら、

行忠「手」

林田「手？」

行忠「人を殴らないとなかなか、あんな
ところに怪我をしない」

○三谷家・客間（夜）

布団が二枚ひかれている。

三谷、心、並んで寝ている。

心「広いお家」

三谷「結婚した時に買ったんだ」

心「なんでおじさんしかいないの？」

三谷「……でてったんだ」

心、三谷へ顔を向ける。

心「どうして？」

三谷「僕に呆れちゃったんだ。仕事ばっ

かりになって、妻と娘をほったら

かしにしてしまったから」

三谷、心へ顔をむけ苦笑する。

三谷「この仕事も、そう思うと向いてな

いのかもね」

心「そうかな」

三谷「え？」

心「あれ」

心、体を起こして扉の方を指さす。

おきやくさんの部屋、と拙い文字で書かれた貼り紙。

その文字の下に家族の似顔絵が描かれている。

心「おじさんの子供は、そう思っていないな
かったかも」

三谷、驚く。

三谷「そうだったらしいなあ」

○矢野家・自室（夜）

暗い室内。

テレビの明かりだけがついている。
る。

原真由美（8）、惣菜パンを食べている。

原早苗（26）が出ているテレビを見ている。

テレビの中の早苗、

早苗「ええ。夫を亡くした今、早く娘の顔を見て安心したいです」

と、涙をぬぐっている。

矢野翔吾（22）、真由美の横に座る。

矢野「明日はどこに行きたい？」

真由美「……お花畑」

矢野「いいね」

真由美、ぼうつと早苗の顔をみている。

早苗の声「みなさん、犯人探しにご協力をください！」

○三谷家・リビング

三谷、呆然とテレビを見ている。

テレビの中、アナウンサー

アナウンサー「目撃情報によれば、犯人

は都内の遊園地でアイスを持つ

たまま目撃者にぶつかり……」

三谷、笑ってテレビに背をむけ
三谷「間抜けな奴もいるんだなあ」

○庭園

色とりどりの花が咲いている。
心、自身のスマホで写真を撮っている。

三谷「自分の？」
心「そう」

心、しゃがんで写真を撮り続ける。
三谷、心のスマホを後ろから覗いて、

三谷「上手に撮るね」
心「ママに見せてあげるの」

三谷、微笑む。
心「……ねえ」

三谷「ん？」
心「私だったら、髪飾りが欲しい」

三谷、ぽかんと口を開ける。
心、立ち上がって、

心「次、あっち行きたい」

三谷、心に倣い立ち上がり、

三谷「よし、いこっか」

○同・ベンチ

ハイネックにキャップ帽を被っ

た矢野、ベンチに座っている。

三谷、一つ空間を開けてそのベンチに疲れたように座り込む。

大きく伸びをする。

矢野「お疲れですね」

三谷「え？ああ、ええ」

三谷、苦笑する。

矢野、少し離れたところで写真を撮っている心を見ながら、

矢野「娘さんですか？」

三谷、少し動揺して、

三谷「あ、はい」

矢野「大変ですね、父親。子供ってすごく元気だから」

三谷「そう、ですね。でも」

三谷、心見て、

三谷「光荣だと思えます」

矢野「光荣？」

三谷「そんな元気な子供の姿を見れるの

は、とっても光荣です」

矢野、そんな三谷を見て微笑む。

矢野「僕もあなたみたいなのが父親だっ

たらよかった」

三谷「ええ？」

矢野、立ち上がる。

左手に小さな引っ掻き傷がある。

小さく会釈して去っていく。

少し先で真由美と合流する。

三谷、それを見て、

三谷「あの子……」

心「おじさん」

心、三谷の肩を叩く。

三谷、それに驚き、振り向く。

心「お腹すいた」

○大学・食堂

涼香、電話をしている。

涼香「ええ？！今日もですか？」

生姜焼き定食を食べている。

涼香「矢野先輩、休みすぎですよね？
いっつになっただらサークルに顔出
すんですか、もー」

○庭園

矢野、真由美と手を繋ぎながら涼香と電話している。

矢野「ごめん。またすぐ顔出すから」

涼香の声「前もそう言ってましたよ！先輩いないと全然話進まないんですよ」

真由美、心配そうに矢野を見上げる。

矢野「大丈夫。本当すぐに全部片付けてそっちに顔出すよ」

○大学・食堂

涼香、少し怒り気味に、

涼香「約束ですからね？もうみんなパス

ポートも取ってんですから。はい、

はい、じゃあまた連絡ください。

はい」

電話を切る。

ため息をつく。

涼香、思い出したように、

涼香「あー、明日ママに会うんだった」

○古い定食屋・中

落ち着いた店内。

テレビの音が響いている。

店員「はい、どうぞ」

年配の店員、心と三谷へ料理を運んでくる。

店員、三谷をチラリと見るが、そのまま去っていく。

三谷「いただきます」

心「いただきます」

三谷、心、それぞれ食べ始める。

心、オムライス。

三谷、生姜焼き定食。

店員、チラチラ三谷たちを見て、

コソコソ話している。

三谷「今日、お母さんの手術だね」

心「うん」

三谷「怖い？」

心「うん」

三谷、もくもく食べる心を見つめる。

三谷「心ちゃんのお母さんはすごいね」

心、オムライスを食べ続ける。

三谷「あんなに君の事を思ってる。すご

くいい母親だ」

三谷、考え込むように、

三谷「ねえ、心ちゃん。あのね」

店員の声「ええ、はい。多分あの誘拐犯

で間違いないかと」

三谷、その声に言葉を止める。

店員の声「はい。首元の大きな大きなほくろに、
小さな子供と一緒に連れていま
す」

三谷、電話している店員の顔を見
て思わず肩をびくつかせる。

机をトントンと指で叩く。

三谷「心ちゃん心ちゃん」

心、首を傾げる。

三谷、引き攣った顔で、

三谷「逃げよう」

心「え？」

○同・外

三谷、心、物陰から定食屋を見て
いる。

表で警察と店員が会話している。

三谷、警察と一瞬目があい驚いて
すぐに物陰へ身を隠す。

心、三谷の袖をひく。

心「どうして隠れるの？悪いことしてな

いのに」

三谷「え。まあ、そうなんだけど……」

心「変」

三谷「や、だって……」

三谷、心の前にしゃがみ込む。

三谷「お巡りさんだよ？怖いじゃん」

心「悪いことしてなかったら怖くない」

三谷「悪いことしてなくても怖いさ」

心、呆れたようにため息をつく。

警察「あの」

警察、後ろから声をかける。

警察「少しお話よろしいですか？」

○アパート・早苗の住む部屋・前

チャイムの音。

早苗、出てくる。

早苗「はい」

行忠、林田、並んで立っている。

林田「何度もすいませんー。お話、もう一度詳しく聞かせていただいていた方がいいですか？」

早苗、嫌そうな顔。

○同・中

行忠、林田、並んで腰を下ろしている。

テーブルを挟んでその前に早苗が座っている。

林田「引っ越したんですね」

早苗「ええ、まあ」

林田「随分綺麗なマンションですねえ」

早苗、鬱陶しそうに顔を顰める。

怒ったように、

早苗「夫が死んだところにいつまでもいられると思いますか」

早苗、立ち上がろうとする。

林田、それをなだめるように、

林田「ああ違いますすいません。単純な

感想ですよ」

早苗、再び座る。

行忠「辛いと思いますが、もう一度犯人の特徴をお聞かせ願えますか」

早苗「今更なんですか」

行忠「もう事件から二週間経とうとして
います。複数の犯人の目撃情報
ありますがどれも指名手配する
に及びません。なので、もう少し
はつきりとした情報が欲しいん
です。どうかご協力ください」
早苗、黙り込み、それから小さな
ため息をつく。

早苗「首に大きなほくろがあつて」

林田、メモを取り始める。

早苗「顔はほとんど見えませんでした。
けど身長が175センチくらいあ
ったと思う。旦那より高かったか
ら。で、男」

行忠「それだけ？」

早苗、俯き行忠から目をそらす。

林田、行忠に様子を伺う。

行忠「本当にそれが全てですか？」

早苗「……手に」

林田「手に？」

早苗「小さな引っ掻き傷があります。且

那と口論になって揉めたので」

行忠、林田目を合わせる。

行忠「どうして話してくれなかったんですか？」

早苗、俯く。

○路地

小さい酒場が立ち並んでいる路地。

三谷「いてっ」

三谷、心が抱えている猫に手を引
つかかれる。

心「だめ」

心、猫にしかる。

三谷、自分の手を見つめて小さなため息。

三谷「警察に誘拐犯と間違えられるなんて……。僕、不審者に見えるのかな」

心、猫と戯れながら、

心「逃げなければよかったのに」

三谷、心の横にしゃがみ込む。

三谷「それは無理だよ」

心「どうして？」

三谷「だって今日が終わるまで、僕はま

だ心ちゃんのパパだから」

心、三谷に目をやって、

心「変」

三谷「ええ？」

心「警察から逃げたら勘違いされちゃう」

三谷、肩を落として、

三谷「その通りだ」

猫、三谷へ擦り寄る。

三谷、驚く。

猫へおそるおそる手を伸ばす。

猫、大人しくその手を受け入れる。

三谷、微笑んで、

三谷「でもこの仕事はきつと、今まで自分

がしてきたどんな仕事よりも大事なものだから。だから、やっぱり

逃

げて正解だよ。何も悪いことはし

て

ないんだし、後で事情を話せばな

ん

とかなるさ」

心、三谷をじっと見つめる。

岡本順子（38）、

順子の声「メルちゃん。メル？」

猫、声の方へ歩いて行く。

着物を着た女性が立っている。

順子「あら」

三谷、会釈する。

○スナック「舞」・中

心、オレンジジュースをストロ
ーで飲んでいる。

猫、後ろのソファで毛繕いをし
てる。

順子、グラスを拭いている。

順子「野良猫ですよ」

三谷「え」

順子「あんまりに可愛いんで、ほって置
け

なくて。こうして餌をあげてるん

で

す。ほぼ飼う猫ですね」

三谷、猫へ目を向ける。

順子「それはそうと、おたくは？随分と
バ

タついていたようだけど」

三谷、ボサボサの髪を急いで手で
直す。

順子、くすくすと笑う。

順子「ごめんなさいね」

順子、三谷の曲がったネクタイを
カウンター越しに直す。

順子「あら、これ」

順子、三谷の首元のほくろを見て、

順子「一緒だわ、あの子と」

三谷「一緒？」

順子「そう。前にメルをお世話していた
子なんだけどね。あの時は高校生

か

しら。この辺りを通学路にしてい

る

子でね。学校帰りよく餌をあげて

い

たの」

三谷「へえ」

順子「このほくろ。あの子も確かこの
辺

りに大きなほくろがあったの。今

は

確か……、菅野大学に通っている

ん

だったかしら」

三谷「菅野？僕の娘もそこに通っている

んですよ」

順子「そうなの？何か縁があるかもしれない

ないわね」

心、ジュースを飲みながらスマホ

で写真を見返している。

○病院・307号室・中

麻美、震える手を強く握っている。

麻美「大丈夫。大丈夫」

大きく息を吐く。

棚に飾られた心の写真に目をや

る。

麻美「ママは大丈夫だからね、心」

看護師「中川さーん」

麻美、笑顔を作って、

麻美「はい」

○ゲームセンター・中

うるさい店内。

真由美、クレインゲームの景品の人形をじっと見つめている。

矢野「取ってあげようか」

真由美、矢野を見上げて頷く。

×

×

×

真由美、大きな人形を抱えている。

矢野、それを微笑ましそうに見つめて首元のほくろをかく。

赤くなった首元。

真由美「大丈夫？」

矢野、真由美の頭を撫でながら、

矢野「大丈夫だよ」

真由美「でも」

真由美、矢野の手を掴む。

爪の間に血が入り込んでいる。

真由美「血、出てるよ」

矢野、それを確認してから苦笑する。

矢野「邪魔なんだよ、これ」

○コンビニ・中

矢野、コンビニで絆創膏を購入する。

○コンビニ・外

矢野、出てくる。

真由美、高校生に絡まれている。

高校生「どうすんのこれ」

真由美「……」

矢野、地面に落ちた炭酸飲料とそれに濡れたタバコを見つける。

矢野「あの」

高校生「あんたこの子のお兄さん？ちよつとこれ、どうしてくれるの。」

買

ったばっかなんだけど」

矢野「弁償します」

高校生、ため息をつき矢野の胸ぐら
らを掴む。

高校生「その前にまず謝罪を……、ほく
ろ？」

血がついた首元のほくろが見え
る。

矢野、高校生を引き剥がす。

矢野「すみません。弁償します」

×

×

×

高校生、コンビニの袋を持って立
ち尽くしている。

矢野と真由美の後ろ姿。

高校生、スマホをポケットから取
り出し、それを耳に当てる。

高校生「あーとっ、すみません。今あ……

：

○アパート・前・道

行忠のスマホ、通知音になる。

行忠、ポケットからスマホ取り

出しを確認する。

動きを少し止めるが、それからすぐにスマホをしまう。

林田「いいんですか？返信しなくて」

行忠「急ぎじゃない」

林田、歩き出した行忠へ並ぶ。

林田「来てよかったっすね」

行忠「ああ」

行忠のスマホが鳴る。

行忠、再度立ち止まりスマホをポケットから取り出す。

行忠「もしもし。……はい、はい」

林田のスマホが鳴る。

林田、ポケットからスマホを取り出す。

林田「はいもしもし。はい。はい。お
っ。了解しました。はい、すぐ向
かいます」

林田、電話を切る。

行忠、電話を切る。

行忠「林田」

林田「行忠さん」

行忠「犯人の目撃情報だ。行くぞ」

林田「やっぱり！よし、了解です！」

林田、行忠、反対方向へ歩き出す。

行忠「どこ行くんだ」

林田「え？」

○スーパードット中

矢野、真由美買い物をしている。

矢野「今日の晩御飯は何にしようか」

真由美、矢野の後ろをついていく。

賑やかな家族とすれ違う。

それを目で追い、段々と呼吸を荒
くする。

○（回想）アパート・原家・中

真由美、早苗に抱きしめられている。

早苗、震えている。

真由美の父、酒の缶を投げる。

（回想終わり）

○スーパー・中

矢野、野菜を選びながら、

矢野「ね、真由美ちゃん」

真由美の反応がない。

矢野、不審に思い振り向く。

矢野「真由美ちゃん？」

真由美、いない。

○歩道

矢野、慌てたように息を切らして走っている。

○小学校・前・歩道

矢野、立ち止まって、

矢野「真由美っ。真由美ちゃんっ」

キョロキョロあたりを見渡す。

絆創膏が貼られた首をかく。

○公園

子供や親子連れで賑わう公園。

矢野、息を切らして走ってくる。

キョロキョロあたりを見渡して、

大きなため息をつく。

息を切らしながら、

矢野「どこ行ったんだ」

○クレープのキッチンカー・前

三谷、クレープを片手に立ち尽くしている。

キョロキョロと辺りを見渡して、

三谷「心？」

三谷、近くにいたおばあさんに、

三谷「あ、すいません。こちらへんで小さい女の子見ませんでしたか？」
おばあさん、首をふる。

三谷、小さくお辞儀して、次に通りがかった若い女性に、

三谷「ああ！すいません。こちら辺で小さい女の子見ませんでしたか？」
女性、引き気味に首を振り去っていく。

三谷、また小さくお辞儀して次、
通行人の男性に声をかける。

三谷「あのすいません」
通行人の男性、立ち止まることなく通り過ぎていく。

三谷「あっ……」
三谷、もう一度辺りを見渡してため息をつく。

三谷「どこ行ったんだ……」

○公園前・歩道

心。スマホ片手に立ち尽くしている。
る。

スマホでマップを開いているが、
読み込み中の文字。

心「どうしよう……」

○住宅街

三谷、息を切らし、困ったように
佇んでいる。

三谷「心ちゃん……」

後ろから袖を引かれる

三谷、驚いて、

三谷「心ちゃん！」

振り向く。

真由美、三谷を見上げたっている。
大きな人形を抱えている。

三谷「え？」

真由美「……迷子になりました」

三谷「君……」

真由美「迷子になりました。助けてくだ

さ

い」

×

×

×

三谷、真由美、並んで歩いている。
真由美、クレープを食べている。
左足を引きずっている。

三谷「小学校の方となると……、ここから
三駅くらいのところかな。他に

は？」

真由美「オーイスーパーがあります」

三谷「じゃあきつと僕が思っているあたりで間違いはないね。親御さんとはその辺りではぐれたの？」

真由美「……はい」

三谷「どうしてはぐれたのかな？」

真由美、黙る。

三谷「真由美ちゃん？」

真由美「……お化け」

三谷「お化け？」

真由美「殺されるかと思ったから、逃げな

きゃって」

三谷「……真由美ちゃんが探しているの
って、お兄さん？」

真由美、三谷を見上げる。

真由美「お兄ちゃんじゃないよ」

三谷「え？」

○公園・中

矢野、ベンチに座ってうなだれて
いる。

首をかいている。

心「あの」

心、矢野に声を掛ける。

心「この病院の場所わかりますか？」

矢野、顔をあげる。

○病院・前

矢野、心、病院の前に立っている。

心、矢野を見上げて、

心「ありがとうございます」

矢野、微笑む。

矢野「反対方向だったね」

心「うん」

矢野「じゃあ。気をつけてね。僕、人を探

しているから」

心「ありがとうございます」

心、歩き出すが立ち止まる。

矢野、不思議そうに、

矢野「どうしたの？」

心「ママが、もし死んじゃったらどうしよう

う」

矢野、心へ近づいて、飴を差し出す。

矢野「気休めに」

心、それを受け取る。

心「ありが……」

心の声、被さるるように、

林田「すいませーん」

心、矢野振り向く。

林田「少しお話いいですかね？」

林田、警察手帳を見せる。

○公園

親子連れで賑やかな公園。

三谷、真由美、ベンチに座っている。

三谷「こっちの方向なんだよね？」

真由美「うん」

真由美、俯いている。

真由美「どうして助けてくれるの？」

三谷「どうしてって。僕は大人だから」

真由美、三谷を見上げる。

真由美「ありが……」

真由美の声、遮るように

行忠「すいません」

真由美、三谷振り向く。

行忠「少しお話よろしいですか？」

行忠、警察手帳を見せる。

三谷「え」

真由美、三谷の手を引き、走り出す。

三谷、驚いて少し前のめりになりながら、

三谷「うわっ！」

と走り出す。

○歩道

心、矢野、林田から逃げている。

矢野、心をおぶっている。

林田「おい待て！」

矢野、息を切らしながら。

矢野「平気！？」

心、矢野の耳元で、

心「もっと早く！」

矢野、裏道へ入る。

ゴミ箱を蹴飛ばし、走る。

林田、舌打ちしながらそれを飛び越える。

○電車沿い・歩道

三谷、真由美、行忠から逃げている。

三谷、真由美を肩車している。

電車が横を通り過ぎる。

三谷、やけくそ気味に、

三谷「なんで逃げてるんだ！」

○病院・手術室

麻美、手術台に寝転んでいる。

大きな息を吐く。

○商店街

三谷、真由美、行忠から逃げている。

三谷、人とぶつかりそうになり大きな声をあげる。

三谷「すいませーん！どいてくださーい！」

人々、驚いてように咄嗟にはけいく。

行忠「おい待て！」

真由美、叫ぶように、

真由美「だめ！逃げて！」

三谷「なんで君がそこまで必死なんだ！」

真由美「私のせいだから」

三谷「へ？」

真由美「私が誘拐された子供だから！」

○（回想）・古い定食屋・中

店員、電話している。

店員「ええ、はい。多分あの誘拐犯で間違いないかと。はい。首元の大きなほくろに、小さな子供と一緒に連れていきます」

三谷、電話している店員の顔を見て思わず肩をびくつかせる。

(回想終わり)

○商店街

三谷、驚いて、

三谷「ええ！？」

真由美「お願い逃げて！」

三谷、後ろを振り返る。

追いかけてきている行忠。

あまりの形相にパッと前を向き

直

す。

三谷「うあー！よし！」

三谷、急に道を曲がる。

狭い路地裏に入る。

○病院・手術室

慌ただしい医師たち。

麻美、目を閉じている。

心電図モニターの大きい音。

○路地裏

三谷、真由美、行忠から逃げてい
る。

三谷、ゴミ箱を倒そうと蹴るが揺
れるだけで倒れず諦めて走る。

○商店街

三谷、真由美、行忠から逃げてい
る。

老人の横を通ると、老人が驚いて
買い物袋を放り投げる。

中からみかんが散らばる。

その一つが真由美の手に乗る。

真由美、それをじっと見つめる。

行忠、三谷に追いつき、腕の袖を

掴

む。

真由美「はい」

真由美、行忠にみかかんを渡す。

行忠、思わずそのみかんを受け取る。

三谷、その間に走り出す。

行忠、みかんと三谷を交互に見て、三谷をまた追いかける。

○ ショッピングモール

矢野、心、林田から逃げている。

矢野、人々の間をうまくすり抜けていく。

○ 同・洋服屋

矢野、心、帽子をかぶってしゃがみ、

服の影に隠れている。

矢野「どうして逃げたがるの？」

心「……ママの手術が終わってすぐに会えなくなっちゃう」

矢野、理由を聞いてすぐに微笑む。

矢野「悪いことしてないのに逃げる方が、
会えなくなっちゃうかも」

心「逃げて。せめて今日は」

心、矢野を見つめる。

林田の声「いた！」

矢野、心、帽子を取って再び走り

出

す。

○同・前・歩道

矢野、心を抱え走っている。

林田、息を切らしながら追いかけて
いる。

○商店街

林田、必死に矢野と心を追いかけて
いる。

矢野、心、手を繋いで走っている。

林田「くそっ！待て！」

手前の曲がり角から三谷と真由

美

が出てくる。

真由美、三谷に片手で担がれてい
る。

その後ろから行忠が走ってくる。

行忠、三谷を捕まえる。

心、それを見て思わず、

心「おじさん！」

林田、矢野の手を掴む。

三谷、心の声に気づき驚いて、

三谷「心ちゃん！」

矢野、真由美を見つける。

矢野、心、林田に捕まる。

行忠、心に気付き、

行忠「お前……」

心「パパ？」

三谷、そのやりとりを聞いて驚く。

三谷「え！？」

行忠、心を呆然と見つめる。

林田「もう！何が何だか……」

矢野、林田を思いっきり振りはら
って、心を拘束する。

三谷「心ちゃん！」

行忠「心！」

心、驚いたように、

心「名前……」

矢野、息切れしている。

矢野「交換しろ。真由美ちゃんとその子」

三谷、真由美を見る。

真由美、じっと矢野を見つめてい
る。

矢野、ポケットからナイフを取り

出し、心へ当てる。

三谷、慌てて、

三谷「心ちゃん！」

心、じっとしている。

行忠「はなせ！」

矢野「交換だって言ってるんだ」

矢野、空いている方の手でぼりぼ
りと首をかく。

行忠、林田、目を合わせる。

林田、後ろから矢野に飛びかかる
うとするが、

矢野「殺すよ」

矢野、心の首へ強くナイフを押し
当てる。

心「いたっ」

三谷「やめろ！」

矢野、三谷と目が合う。

矢野「あの時の」

三谷「真由美ちゃんが」

三谷、息を飲む。

三谷「真由美ちゃんが、君がお兄ちゃん
だ

「だったらよかったって言ってた」

○（回想）住宅街

真由美、三谷、並んで歩いている。

真由美、三谷を見上げる。

真由美「お兄ちゃんじゃないよ」

三谷「え？」

真由美「お兄ちゃんだったらよかった人」

（回想終わり）

○商店街

真由美、じっと矢野を見つめる。

矢野、泣きそうな顔。

真由美、左足を引きずりながら、

矢

野の方へ歩く。

真由美「パパを殺した」

三谷「……え？」

真由美「私が、パパを殺した」

○（回想）アパート・涼香の住む部屋・
前

矢野、涼香の部屋から出てくる。

涼香「じゃあまたサークルで！支援会、
が

んばりましようね！」

矢野「うん。じゃあ」

扉、閉まる。

矢野、携帯を取り出し帰ろうとする。
る。

少し歩いたところから騒ぎ声が

聞

こえてくる。

矢野、立ち止まり聞き耳を立てる。

女性の騒ぎ声。

矢野、扉を叩きながら、

矢野「すみません。大丈夫ですか？」

返事がない。

矢野、ドアノブを回すと、ドアノブが回る。

矢野「お邪魔します」

倒れている真由美の父、呆然と立ち
ち尽くす真由美と早苗。

真由美、矢野を見つめる。

（回想終わり）

○商店街

真由美、人形を抱きしめて、

真由美「ママが初めてパパを殴った。酔
っ

払ったパパをいっぱい殴った。

で

もパパがママにやり返すの。そ

れ

で……」

矢野「真由美ちゃん」

真由美「それで、私がパパを押し倒した
の。

そしたら机に頭が当たって、血

が

いっぱい出て」

矢野、真由美の声を遮るように、

矢野「真由美ちゃん！」

矢野、泣いている。

矢野「やめよう」

○警察署・中

真由美、早苗と再会する。

早苗、真由美を抱きしめる。

矢野、それを見つめる。

早苗、矢野の方へ歩いてくる。

早苗「迷惑かけてごめんなさい。ありが

と

う」

早苗、矢野を抱きしめる。

矢野、涙目になる。

林田、息をつく。

真由美、矢野に近寄って、

真由美「ありがとう」

矢野、涙ぐみながら笑う。

○路地

小さい酒場が立ち並んでいる路地。

矢野、歩いている。

猫が矢野に擦り寄ってくる。

矢野「メル」

矢野、メルの頭を撫でる。

順子「あら」

矢野、顔をあげる。

順子、手を振っている。

○公園（夕）

親子づれで賑わっている公園。

三谷ベンチに座って、空を見上げている。

涼香の声「パパ」

三谷、片手をあげて、

三谷「久しぶり」

×

×

×

三谷、涼香、並んで話している。

涼香「うちのサークル、矢野先輩の提案で
海外に行くことになったの。海

外の子供達を支援しようって」

三谷「ボランティアサークル？」

涼香「そうそう。先輩、父親から虐待受け

てたみたいでさ。だから、そうい

っ た子供たちの助けになればって」

三谷「ああ、そうだったのか」

涼香「電話で今日全部聞いたの。パパ、大

変だったね」

三谷「お前こそ。今日どうだったんだ？」

涼香「あ、ママの再婚相手？」

三谷、体が硬っている。

涼香、笑って、

涼香「ママ、やっぱり男見る目あるよ」

三谷「え」

涼香「嘘」

三谷「それどうゆうこと！」

涼香、笑う。

三谷、息をついて、笑う。

笑終わり、忙しなくあたりを見渡し、

三谷「涼香」

三谷、バックから包装された小さな小箱を取り出そうとする。

○病院・307号室・中

窓の外、車椅子の子供が風船を持って母親と笑い合っている。

麻美、それを見て微笑んでいる。病室の扉がノックされる。

麻美「はい」

心、行忠が入ってくる。

心、麻美に抱きつく。

行忠、扉のところで突っ立っている。

麻美、手招きする。

麻美「心」

心、顔をあげる。

麻美「お誕生日会、しよつか」

窓の外、風船が飛んでいる。

心、それを見る。

心「あのね」

麻美「ん？」

心「いろんなことがあったの」

○家・玄関

インターホンの音。

小さい女の子が扉を開く。

三谷、笑顔で、

三谷「さ、今日はパパとお出かけしようか」